

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特例規程承認第(七)号  
明治三十二年十月十日第三種郵便物認可(毎月四日発行)  
平成十九年五月一日発行(第百十卷第五号)

# ホトトギス

五月号



## 俳句随想 〔二百九十九〕

汀子

統辞の軸というのは、言わば言葉の縦軸であって話線に沿って継時的に言葉を結合し意味を明確にしてゆく。その時、言葉を結合する規則が文法というわけである。このようにして正しく結合された一連の言葉は明確な意味を持ったいささかも曖昧さの無い文章となる。私達が学校で教えられ、日常で使っている言葉はまさにこの縦軸に沿った言語活動なのである。

ところが言葉には連想軸という言葉わば横軸があって、それは普段は意識されずに潜在しているとソシユールは言うのである。そしてこの横軸が働きたすのは、主として文章が不完全な時、或いは話線が途中で止まってしまった時だと言うのである。連想軸の働きというのは、文中に置かれた言葉が文の意味とは別に、その言葉が喚起する連想によってイメージを伝達することである。しかしこの働きは即時的なのである。話を具体的にするために私は次のような例をあげた。

〈古池や蛙とびこむ水の音〉

この芭蕉の名句で、蛙は一体どこにとびこんだのでしょうか。

旬日記 汀子

平成十八年五月一日 ロイヤル俳壇

夏近きことを諾ふ日の外出  
白玉と別の甘さをすゝりけり  
みよし野の花の心を惜めとや

五月十日 ホトトギス社吟行会

夏近し今日は都心も空いてぬし  
坂薄暑下りは風の通り道  
軽暖の歩を軽快に神楽坂

五月六日 芦屋ホトトギス会

葉桜に記憶の頁埋めけり  
町内の音色はみ出す祭笛  
五月七日 関西野分会

旅疲れ立夏の雨にくつろげる  
筍に至福の雨の朝となる  
塗りかへて今新緑の庭となる

五月七日 下萌句会

葉桜に別の明るさありし庭  
みよし野の葉桜として鎮もりぬ  
又一人追はるる如くはたがみ

五月九日 大阪倶楽部

菖蒲湯に家族少なきことをふと  
祭笛夕風に乗り来たるもの  
みよし野の若葉に埋れゆるもの

五月九日 網業倶楽部

活けられて草上も又夏めける  
この山路いつもの難所抜けて余花  
みよし野の余花へ山路のつゞきけり

五月十一日 清交社

景展け余花の出逢ひとなりしこと  
又次の草に草笛改める  
草笛を吹いては捨てて新しかな

五月十二日 工業倶楽部

誰からの花といはずも母の日よ  
母の日の今年も旅にあることを  
五月十三日 四国ホトトギス同人会

大橋を渡る卯の花腐しかな  
雨蛙機嫌の声を張りにつけり  
遠さとは香りなかりし朴の花

五月十四日 四国ホトトギス俳句大会

母の日の母を忘れて旅にあり  
椎の花匂ひはじめし土佐の晴  
回顧あり土佐の棟の花の頃

五月十五日 アサヒカルチャー

一日は卯の花腐しなる旅路  
軽暖の土佐の旅はや遠きかな  
大橋を渡る五月の落日に

五月十六日 有恒倶楽部

椽新樹庭を覆ひて止まざりし  
今日も又卯の花腐し空仰ぐ  
降り出してまこと卯の花腐しかな

夏霞より抜け出せぬ空の旅  
彗星につすく卯の花腐しかな  
誰が植ゑし茄子育つてをりしかな

五月十五日 無名会

穴子飯一人増えたる午後の客  
旅終へてくつろぐ家居若楓  
水音の絶ゆることなし若楓

五月十七日 夏潮句会

高砂の老舗の穴子土産として  
若楓風の変幻水の面に  
初鯉期待の土佐の旅路あり

みよし野のえに花はいつのこと  
桜若葉伸び伸び花はいつのこと  
咲く期待なかりし朴の花咲けり

五月十八日 野分会

彗星を今宵も隠す若葉雨  
雨叩く若葉の音の庭となる  
朴の花咲きぬしことは知らざりし

五月十八日 クラブ合同

鉄線花雨粒こぼしはじめけり  
いくたびも庭に出てみる朴の花  
五月二十日 北海道ホトトギス同人会

卵浪立つ東京湾を発ちしこと  
夏霧も抜けてゆくもの着陸す  
蝦夷は初夏耐へ来し日々を語らずに

五月二十日 北海道ホトトギス俳句大会前日句会

明るさを見どりに広げゆる蝦夷  
北国へタイムスリップライラック  
五月二十日 北海道ホトトギス俳句大会前日句会

五月二十一日 北海道ホトトギス俳句大会

これよりはみどりの大地に着陸す  
たんぼぼの花の仔細に陸す  
若葉萌ゆ動きはじめし大地より

五月二十五日 きらぎ会

快晴の朝夏帽子買ふホテル  
残雪の手福山どこまでも視野  
若楓朝日をたらへはじめけり

豆飯をにぎつてもらふ早出かな  
雨霰こぼして風の残さざり  
若楓影ふえゆきぬ旅婦り

五月二十六日 時雨会

触るるたびこぼれ卯の花なりしかな  
母の日といへば今年も旅にあり  
贈られし花を飾れば母の日よ

五月二十七日 句会と講演の会

本当の江戸つ子神田祭かな  
卯の花の咲く々至る花卯木  
雨雲の次々野路の偲ぼる

五月二十八日 野分会

麦笛の大地に風の起りけり  
なき如くありし草取どきまでも  
又見えて見えて草取止められず  
五月二十八日 野分会

五月二十八日 野分会  
筍に一日おきの雨もよひ  
はみ出して筍の場を広げゆく

# 廣太郎句帳

## 廣太郎

平成十八年五月三日 一水会

石 嶮 玉 弾 け 魂 飛 び 出 せ り

五月四日 ホトトギス社吟行会

サスペンスドラママロケ隊更衣

大日本印刷 近し 夏 近し

牛込の昔 残せし 路地 暮春

五月八日 朝日カルチャー若草俳句会

ヴィオロンの音と薔薇の香に満たされて

かしはもちちやつちやとしいやをとこやろ

薔薇二千三百四十五本の香

五月十一日 土筆会

草笛のテノールは僕アルト君

筍に鎌の存問ありにけり

草笛の妙技に鳥語鎮もれり

草笛の名人たりて大指揮者

草笛の音に青空の降りてきし

五月十三十四日 四国ホトトギス同人会 大会

神木の新緑といふ明るさに

第三十一番札所若葉雨

朴の花土佐に雨雲引き寄せて

筆山の穂先隠して夏霞 葉桜に雨は有情でありにけり

蜻蛉生る土佐の川風友として 五月二十一日 北海道ホトトギス同人会 大会

青鷺に木々低くなるひくくなる 汗をさめたる空港のロビーかな

羽光りつつ霞へつつ蜻蛉生る 雪溪に繋がる蝦夷の空広し

五月十六日 草木瓜会 ライラック机上に香り移されて

土佐といふ活気に糺られ初鰹 二年てふ歳月早し蝦夷の夏

新緑に古刹は霊気放ちけり 梅雨の無き清々しさに降り立ちぬ

初鰹いごつそうてふ面構へ ライラック先づ香りよりもてなされ

新緑の多摩の稜線近づき来 たんばの黄が揺れ飛機の着陸す

初鰹三十七年振りの土佐 帰心又この涼しさに消えゆけり

五月十七日 登高会

カレー屋の匂ひ卵の花腐し中 樟若葉山盛り上げてをりにけり

その言葉消して卵の花腐しかな 苗売の声より村の動き初む

六甲の端山より夏来りけり 軽暖や今日は約束してへんで

街淡く淡く立夏でありにけり 樟若葉して千年を引き寄する

輝きを蔵し里山若葉かな 軽暖や癒えたる人の消息も

五月十八日 蕉心会

若葉雨 大川の色淡々と 更衣して一端のサラリーマン

大川の芥夏めく流れかな 山車を曳く君との距離を近づけて

下町に祭気分の漲れり 更衣黒を好みし女かな

蕉心会美女軍団の夏めける 更衣して未来へと歩み初む

来年の満開秘めて若葉雨 駅を出て祭囃子に吸はれゆく

満潮といふ祭めく騒きかな 五月二十七日 ホトトギス社吟行会

蕉像に卵の花腐し睨まれて 草取や都心庭付一戸建

階を上り下町若葉雨 草を引く三菱地所の偉いさん

# 雑詠

## 廣太郎 選

師走てふ景気見られぬ町中を 福岡 松尾緑富  
旧道のこゝも閉店年の暮 同  
駅前の師走景気の今一つ 同  
かの日まだ昨日の事よ寒の雨 神戸 涌羅由美  
街ひとつ祈りで満ちて冬灯 同  
十二年春待つ心持ち続け 同  
震災を悼む未明の寒の雨 長岡 安原 葉  
悴みて又の余震に怯えをり 同  
偲ぶ初句会にはやも訃音あり 同  
淋しめばひたひたと晩秋の海 榎原 稲岡 長  
小春日のつゞく限りや母を恋ふ 同  
小春日の莫蔭に並べし色を売る 同  
月光を積みあげて野の霜柱 神戸 長山あや  
鯨てふ海の王者のかなしき目 同  
雪折といふ一瞬の木の叫び 同  
青空に深々と冬木の沈む 大阪 埴 告冬  
青空が元旦の風かくしたる 同  
初暦うち囲み日を決めにけり 同

寒林の構図の一步づつ傾ぐ 香川 湯川 雅  
昨夜幹事今宵座持ちに年忘 同  
著ぶくれて人波に引つばられゆく 同  
潤滝と土地人の言ふ水の嵩 龍ヶ崎 今橋真理子  
一筋にして脈々と滝潤る 同  
冬銀河昼間は何もなき山河 同  
初日さすソウルは遅き桃色に 八尾 岩垣子鹿  
肉を焼き強き酒欲り温突に 同  
鵲の自由に国境線凍つる 同  
銀行の椅子にうたた寝師走人 熱海 嶋田摩耶子  
門松や聖樹あとかた無く消えし 同  
コンビニに湯気の魅力のおでん買ふ 同  
初富士の見えざることを見て帰る 同 嶋田 一步  
初携帯電話となりし富士を見て 同  
初鴉熱海海岸出ずにとぶ 同  
しぐるるや心に湖のあるごとく 熊本 岩岡中正  
冬の山深く言葉を蔵したる 同  
イエスには復活木には返り花 同  
初旅となりし機上に時差正す 神戸 千原叡子  
留守まもり咲きふえてぬし室の蘭 同  
帰国してつくづく初湯あふれしめ 同  
子ら遊ばせて冬帝の巨きな掌 山田 弘子  
冬ざれの野を集ひ来し追悼会 同  
一日は人悼むため十二月 同

## 雑詠句評（四月号より）

弘子・基子・純也

雅・一步・昭代

暮潮・小木菟・比奈夫

仁義・廣太郎

こんなにも人を泣かせて冬に逝く

龍ヶ崎

今橋真理子

慟哭の一句。これは身近な仲間の一人を喪つた哀しみの深さを表出した作品である。俳句に喜怒哀楽の感情をストレートに表出することは好ましくないとされる。作者のみならずその悲しみがどれほど深いものであつたかを知ることが出来るが、それを直接的な表現ではなく「人を泣かせて」という間接的な表現で感情を客観化しているところに注目したい。

常に素晴らしい作品を発表し続け、伝統俳句の牽引力の一人であつた秋田の浅利恵子さんの若き死は余りにも大きな衝撃であつた。この冬を越せばまた曙光が見られたかも知れなかつたのにとの思いが「冬に逝く」の下五になつたのであろう。多くの人の胸を凍らせるような悲しい出来事への慟哭の一句である。（弘子）

平成十八年はホトトギスにとつても大切な人が何人か幽明界を異にされた。人の特定はされていないが、作者にとつて野分会のかけがえのない句友浅利恵子氏の、五十八歳というあまりにも早い別れである。この「冬」という季節もさる事ながら、淡々と客観的に叙せられているところがたまらない。（廣太郎）

みちのくの冬野の星となられしか

東京

大久保白村

此の御句は弔句と拝察し、さて何方のことと、俳句世上に弱い私は暫し一考の後、昨年末に伝わつてきた思いがけない訃報、御若い浅利恵子さんのことではないかと思ひ到りました。

お友達の中では「雪の精」と呼ばれ、色白の秋田美人そのものの、俳句は勿論色々の角度から眺めても惜しむに余りある人材、ホトトギス俳誌、伝統俳句界、朝日俳壇その他数々の俳誌上で活躍、それに伴う数々の受賞などなど。ホトトギス就中、野分会きつてのホープであり、団魂時代の先端を率先したスターなのだ。その実力、人品を表現されるのに、冬空に輝くオリオン・シリウスなど青白く美しい冬の星に託された、句の作者、白村氏の御力にあらためて敬意を表し、至上の弔句と申し上げたい。

汀子先生の御句「なほ目さす冬野明るき道のあり」の御句も思ひ合わせて冬野の星をいつまでも眺め偲ばせて頂きたい。

（基子）

天地有情

心子選

双六を上がつてしまひたるやうな  
 脱落の句に立ち戻り読始む  
 バスの窓貫く小春日和かな  
 指先に小春日和を乗せて琴  
 日溜りの庭にしあれど春寒し  
 立春を期し筆下ろす物語  
 極まりし冬紅葉散る一気かな  
 模様替へはじまりし庭春を待つ  
 模様に夜毎の星の雫かな  
 猿酒山の神様夜ごと酌む  
 書写山の星見失ふ後の月  
 俳諧の星加ふ夜の虎落笛  
 天地を光の海にして初日  
 刻々とつゝの風音寒に入る  
 鍵開けて灯ともして冷たさを脱ぐ  
 佳人逝きみちのくしぐれ昏からむ  
 宴終へし教へ子たちと寝待月  
 生きてゐる限りこの岬思草

箕面 井上浩一郎  
 同 東京 稲畑廣太郎  
 同 榎原 稲岡 長  
 同 長岡 安原 葉  
 同 大阪 佐土井智津子  
 同 西宮 本郷桂子  
 同 神戸 長山あや  
 同 山田弘子  
 同 徳島 上崎暮潮  
 同

目覚めけり新年何も変らねど  
 初乗の電車近づく響きかな  
 てのひらのよろこぶ種を採りにけり  
 短日のふつと会ひたき人のゐる  
 閑日月重ぬるほどに冬ぬくし  
 黄色 黄光 白色 白光 松の内  
 神父また俳人にしてクリスマス  
 クリスマス聖書は文語よかりけれ  
 虚子ここに立ちて映りし水の澄む  
 虚子詠みし寺の茶の花垣いまも  
 立ち止る雲なく寒に入りにつけり大阪  
 海をきき冬木は樹齡加へけり  
 いのちあり花鳥調詠去年今年  
 日短の探しものあり離室まで  
 聞ゆるは妻の足音 十三夜  
 贅を見て鴈を賞めてはならぬなり  
 水の音配したる苑冬日和  
 大年の思ひたゆたふ湯にひたる

東京 今井千鶴子  
 同 熊本 岩岡中正  
 同 豊中 瀧 青佳  
 同 神戸 三村純也  
 同 相模原 木村享史  
 同 大阪 塙 告冬  
 同 たつの 浅井青陽子  
 同 神戸 後藤比奈夫  
 同 吹田 宮崎 正  
 同

# 天地有情句評

汀子

猿が木の股に木の実などを隠しておいたのが雨や露で醸して出て来た猿酒は神様が夜毎酌むのであらうと見る作者。

脱落の句に立ち戻り読始む 箕面 井上浩一郎

「虚子百句」で取り上げた虚子の句について読初となった。

バスの窓貫く小春日和かな 東京 稲畑廣太郎

まこと小春日和という暖かいが冬でも強い日差。温暖化か？

日溜りの庭にしあれど春寒し 榎原 稲岡 長

庭には暖かそうな日溜まりがある。出てみるとやはり春寒し。

模様替へはじまりし庭春を待つ 長岡 安原 葉

春へ向けて模様替えすると見た庭の姿に期待を持つ作者。

猿酒山の神様夜ごと酌む 大阪 佐土井智津子

書写山の星見失ふ後の月 西宮 本郷桂子

書写山の星は桑田青虎さん。後の月の光に見失ったように。

天地を光の海にして初日 神戸 長山あや

新しい年を迎える期待。

鍵開けて灯ともして冷たさを脱ぐ 神戸 山田弘子

そしてご主人の遺影に話しかける作者。

宴終へし教へ子たちと寝待月 徳島 上崎暮潮

共に杯を交わした教え子たちと寝待月の夜を更かす。

目覚めけり新年何も変らねど 東京 今井千鶴子

淡々と迎えた新年の朝。いつも平常心である。